

# 生活科の新たな方向を探る

—子どもの身近な生活に目を向けたカリキュラム作りを通して—

市田 真弓<sup>1</sup>

生活科の学習対象は子どもの生活圏である。子どもの生活に身近な場や物を対象とした活動は、繰り返したり振り返ったりすることができる。その活動を通して次第に対象とのかかわりを深め、生活の中で生きる体験になると考える。そこで、地域や子どもの実態を見直し、子どもたちの身近な生活に目を向けたカリキュラム作成を試みた。その際、生活科の新たな方向を模索した。

## はじめに

今、各学校の創意工夫による特色ある教育が求められている。その具体化のためには、子どもや地域の実態を重視したカリキュラム（教育課程）の作成が必要となってきた。

特に生活科は、子どもたちの生活圏を学習の対象としているため、より子どもの実態に沿い、地域を生かしたカリキュラムを作り、実践し、その見直しを行わなければならない。子どもの発想を生かし、活動を広げ深めていくためには、選択できる地域の素材・学習の場を資料として把握し、授業に生かしていくことが大切である。

しかし、実際には、地域の実態を生かしたカリキュラムに基づいて、日々の授業が行われているとは言えない現状もある。あらためて生活科の趣旨・内容などの理解を深め、自校の年間カリキュラムを作成する必要性を感じた。

さらに、生活科の改善点も示されてきた。そこで、そのことをふまえ、小坂小学校の子どもたちの身近な生活に目を向けたカリキュラム作成を試みた。

## 研究の方法

- 1 年間カリキュラム作成方法の理解
- 2 年間カリキュラムの作成

- 1 平成10年度 長期研修員（生活科）  
鎌倉市立小坂小学校

## 内容

### 1 年間カリキュラム作成方法の理解

年間カリキュラム作成に当たって、おさえなければならない事項や作成手順のポイントを調べた。

#### (1) 年間カリキュラム作成の基本

- 生活科の目標の視点をおさえ、内容の理解を深める。（現行指導要領と新指導要領とを比較し、生活科の改善点を探る。）
- 授業時数を適切に割り振る。
- 学校や地域の環境を把握し、生活科マップ・暦にまとめ、活動の広がりを探る。
- 子どもの実態を把握する。

#### (2) 年間カリキュラム作成の手順

- 学習可能な活動のまとまりを探る。
- 単元名を考える。
- 単元の目標を設定し、主な活動を考える。
- 年間単元配列を考える。
- およその時間配当をする。
- 『ウサギとなかよし』の授業実践を行い、単元の内容・時期の適否を確かめる。
- 展開事例を作成する。

### 2 年間カリキュラムの作成

#### (1) アンケートによる実態調査

##### ア 教職員へのアンケートの内容

- 子どもの実態
- カリキュラムのよりどころとしているもの
- 地域を生かす学習材、活動場所

イ アンケート結果と考察

(ア) 教師が思う子どもの実態

<第1表 教師が見た担当学年の子どもの傾向>

		1	2	3	4
		1 進んで学習に取り組む	低 ●●●●●	中 ●●●●●	高 ●●●●●
2 自然の変化に気付いたり関心を向ける	低 ●●●●●	中 ●●●●●	高 ●●●●●		
3 疑問や興味をもったことを調べたり、観察を続けたりする	低 ●●●●●	中 ●●●●●	高 ●●●●●		
4 自分の思いや考えを表現する	低 ●●●●●	中 ●●●●●	高 ●●●●●		
5 自分の役割を責任をもって行う	低 ●●●●●	中 ●●●●●	高 ●●●●●		
6 社会のルールや集団のきまりを守る	低 ●●●●●	中 ●●●●●	高 ●●●●●		
7 動植物に親しみを持ち大切にする	低 ●●●●●	中 ●●●●●	高 ●●●●●		
8 工夫してものを作る	低 ●●●●●	中 ●●●●●	高 ●●●●●		
9 身の回りのものやできごとに関心をもつ	低 ●●●●●	中 ●●●●●	高 ●●●●●		
10 友達と協力して作業をする	低 ●●●●●	中 ●●●●●	高 ●●●●●		

1……そのように思う 2……わりとそう思う  
3……あまり思わない 4……思わない

- 全体的な傾向ではあるが、高学年にいくにしたがって、「あまり思わない」が増えていく傾向となっている。(特に1の項目)
- 低学年において2、8の項目は、担任の感じ方が大きく分かれている。

(イ) カリキュラム作成のよりどころとしていること

<第2表 カリキュラム作成のよりどころ>

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
1 子どもの興味	●	●	●	●	●	●	●			●	
2 先年度の活動		●	●	●			●	●		●	●
3 教科書の内容		●			●		●			●	●
4 研修会他校例	●	●	●	●	●	●		●		●	●
5 学習指導要領	●	●				●				●	
6 その他											

- 全体的に1、4を大切に活動内容を組んでいる。学習は、子どもの興味関心に沿っていることが望ましい。1はとても重要な項目である。
- 3、5はあまり意識されていない。教科の目標・内容をとらえるためには、まず

学習指導要領の読み取りが必要である。

項目の関連において見ると、C・D・G教諭は1と2をおさえているが5がなく、学習すべき内容が入っているか判断できない。またI教諭は、5を重視しているが、その他の項目がなく、内容が子どもたちの興味関心の実態に合っているかどうか分からない。

カリキュラム作成には、教科の目標・内容、子どもの実態、地域の環境のおさえが必要である。1は、大切なものだが、それだけでは、学習内容が偏るおそれがある。5を1に照らし合わせて、カリキュラムを作成しなくてはならない。このことが自分自身を含めて、なされていなかった。

(ウ) 地域を生かす学習材・活動場所

自然とかかわる地域の活動場所として六国見山のふもとが適しているという意見があった。アンケートでは、山のふもとのよさとして、

- 木の実や自然が豊か • 学校に近い  
が理由として書かれていた。漠然と考えてはいたが、あらためて見直してみると他にも以下のようなよさが見えてきた。
- 鎌倉の町が一望できる。天候によって、箱根の山など遠方まで見え、山の名前の由来など、今後の学習の発展が期待できる。
- 夏には生い茂り心地よい木陰をつくる木、笹のトンネルを抜けると目の前に広がる青空、冬には土を盛り上げる霜柱、自然のよさを感じ、その場で自然を利用した遊びができる。
- 山に行く道は、住宅地の中やバスの通る道、畑の横など、変化に富んでいる。
- 日によって、散歩の人やハイカーに出会い自然に人とのかわりかかわりがもてる。冬には、笹をかりとった東が見られ、山の手入れをしている人がいることに気付く。

子どもたちの身近な活動の場は、いつでも繰り返し体験できるよさがある。他にも地域の実態を調べ、活動に生かせる学習材を探った。

(2) 地域の実態

生活科マップ・暦の作成

- 校庭の植物、生き物マップ
- 店や公園、神社などの公共施設マップ
- 生活科暦 (学校や幼稚園、保育園の行事)  
(学校周辺の自然暦) (地域の行事)

(3) 生活科の改善点

教育課程審議会の答申や新学習指導要領と現行学習指導要領の比較から、生活科の改善点を探った。

ア 教育課程審議会答申(平成10・7・29)より

(ア) 改善の基本方針

- 身近な人や社会、自然と直接かかわる活動や体験を一層重視する。
- 活動や体験の中で生まれる知的な気付きを大切にす。
- 地域の環境や児童の実態に応じられるよう内容の改善を図る。

(イ) 改善の具体的事項

- 1年、2年各6項目の内容を、1・2年通して8項目の内容で構成する。
- 地域や児童の実態に応じた多様な活動や体験が一層展開できるようにする。
- 身近で多様な人々と触れ合う活動や体験をより重視する。
- 国語、音楽、図画工作など、他教科等の総合的関連的な指導を一層推進する。

イ 新学習指導要領(平成10・12・14)より

(ア) 目標

- 身近な人々、社会及び自然と直接かかわる活動や体験を一層重視し、「人々とのかかわり」を強調。

(イ) 各学年の目標

- 自分と身近な地域の様々な場所への愛着をもつことができるようにする。
- 活動を通して気付いたことや楽しかったことなどを表現できるようにする。

ことが加筆された。

(4) 年間カリキュラムの作成

新指導要領の8内容を基にし、子どもの実態、地域の実態を配慮し、年間カリキュラム作成を試みた。

考えられる活動を8内容に照らし合わせると下記のように、各学年に主な内容が分かれた。

<第3表 8内容と1・2年の活動との関連>

内容	1	2	3	4	5	6	7	8
1年	●	●		●	●	●	●	
2年			●	●	●	●	●	●

- 1、2の内容は、主として1年に、3、8の内容は、2年に配置し、それぞれ1単元1内容とする。

- 4、5、6の内容は、共通の目標で、1年に2単元、2年に1単元をおく。
- 7の内容は、1・2年ともに扱うことになっており、各学年に共通の目標で、1単元ずつおく。

(5) 授業研究『ウサギとなかよし』の単元を通して分かったこと

学校内の身近な素材であるウサギを取り入れた単元を授業実践し、繰り返し活動できることよさを確かめた。

ア 対象へのかかわり・気付きの深まり

実際にウサギに触ったり抱いたりして繰り返し遊ぶ中で、ウサギの気持ちを考えて触れ合う場面が見られるようになり、ウサギの動作、体の様子などの気付きからウサギにしてあげられることへと気付きが深まってきた。その際、教師の言葉かけや活動へのかかわり方が大切である感じた。

イ 人とのかかわりの広がり

ウサギと活動する中で、友だちとのかかわりが広がっている。

- ウサギと触れ合った喜びを友だちや教師にも味わわせようとする姿
- 発見したことを教えている姿
- 友だちの活動のよさを認める姿
- 同じ目的を持って協力して活動する姿などが見られた。1学期からの継続的な活動があると、飼育委員、調理員、技能員、家族、店の人など、人とのかかわりがさらに広がることと思われる。

ウ 寒さよけを考える時期としての適否

11月半ば、子どもたちも寒さを感じ始めていたが、もっと寒くなってからの方が、ウサギ小屋の寒さにすぐ目が向くと思う。柔軟に時期を設定することが望ましい。また寒さが体感できるよう、授業の時間帯を早くした方がよい。

エ 他教科との関連性

この活動は、他教科・特別活動や道徳との関連を図ることができる考える。

国語：作文 絵本 お知らせ 読書 劇化

音楽：ウサギの歌 名前付けの歌

図画工作：造形活動 絵画 粘土 工作

体育：模倣の運動

特別活動：お月見会 さよならパーティー

